

展示実践報告「太平山神社の絵馬」

坂本 達彦

はじめに

筆者が顧問を務める本学「近世史研究会」と「物と伝承の会」は、平成二八年度より栃木県大学・地域連携プロジェクト支援事業に採択され、太平山神社の大型絵馬を調査してきた。

本社には多くの絵馬が奉納され、社殿や絵馬堂にかげられた。現在、絵馬堂は取り壊され、その絵馬は別の場所で保管されている。両研究会は、主に旧絵馬堂にあった絵馬の調査を進めている。

大型の絵馬の定義は、先行研究において曖昧である。

そこで、本調査では個人で絵馬掛所に奉納するものを小絵馬、それを越える大きさで、先述の旧絵馬堂や建築物の壁や軒下などに掲げられたものを、大型絵馬として調査を進めた。現時点で、その数は一〇〇点を超えている。

本学の二つの研究会による調査成果は、報告書のほか、地元向け報告会で地域に還元してきた。さらに、本年度斯花祭では、成果公開の一環として、本学園参考館においてレプリカの絵馬展示を実施した。小稿は、本展示の活動記録である。

なお、太平山神社の絵馬は、すでに栃木県立博物館により県内の絵馬調査の一環として調査され、報告書で紹介されている²。調査は昭和五八・五九年度に実施され、報告書には本社の絵馬として、文化八年から明治三十七年までの一五点（内六点は年代不明）の目録が掲載されている³。

また、他大学による調査も行われたようで、資料番号を付し、エアキヤップで梱包した状態で保管されている絵馬を確認できた。この調査成果が公表されているか否かは、現時点では未確認である。

1 太平山神社と絵馬

太平山神社は、瓊瓊杵命・天照大御神・豊受姫大神を祭神とする神社である。創建は神護景雲年間（七六七～七七〇）とも、天長四年（八二七）とも言われている。ただし、この時に初めて創建されたのではなく、それ以前から存在しており、元来は月日星の三光天子を祀ったとされる。戦国時代に北条氏直の軍勢が、社頭寺院を残らず焼き払ったため現存していないが、第

一〇〇代後小松天皇（在位一三八二～一四一二）から勅額を下賜されている。近世には幕府より五〇石の朱印地を与えられている。明治維新後、神仏分離をし、明治一〇年（一八七七）に郷社、同二九年に県社となる。

絵馬の起源は、生きた馬を奉納したことにある⁵。馬は古くから神の乗り物として神聖視され、神輿が一般化するまえは、神幸時に鏡を取り付けた櫛を依代として、馬の背中に立てて勧請を行っていた。そのため、祭りにしばしば神馬の献上が行われたが、生馬を献上する際は、飼馬料も添えなければならぬため経済的負担が大きく、馬形を献上する風習が生まれる。

馬形も作り得ないものが馬の絵を献上するようになり、それが絵馬となる。中世になると絵馬は馬の絵に限らず、様々な物が描かれて奉納されるようになる。さらに大型化したものも現れる。大絵馬は祈願・報謝の内容を明示し、公然と大衆の面前に示しているものが多いほか、自らの難事・大事業を成し遂げた記念に奉納したものも見られる。また、絵師が署名・落款し、芸術作品としての性格を帯びるようになり、多様化し

(No.)

物と伝承の会・近世史研究会

サイズ詳細	調査者	寸法・C・M	奉納年月日	絵馬名	番号	調査者	年月日	年月日
	西暦						年 月 日	

写真図

図1：調査書（上段が表面、下段が裏面）

た。当初は神社の拝殿や寺院の堂に掛けたり、貼り付けたが、収容しきれなくなり、絵馬堂が成立する。近世・近代も盛んに絵馬の奉納が行われたと言われている。先述の通り、太平山神社でも絵馬堂に多くの絵馬が掛けられていた。本調査で扱った絵馬の全てが

近世・近代のものであることから、右の指摘が裏付けられる。

2 平成二八・二九年度調査の概要と成果
調査した絵馬の詳細なデータについては、昨年度と

今年度の報告書を参照いただきたいが、平成二八年度は二回、平成二九年度も二回の調査を実施した。平成二九年度末段階で、一〇二点の絵馬を調査した。大きさは一片が二七〇cmを超えるものもあり、重量は成人男性数名でも運搬が難しいものが多数存在する。

調査時には、絵馬を境内の広い場所を集め、ホコリを払った。続いて番号を付け、写真撮影と採寸・調査作成を行った。撮影には、

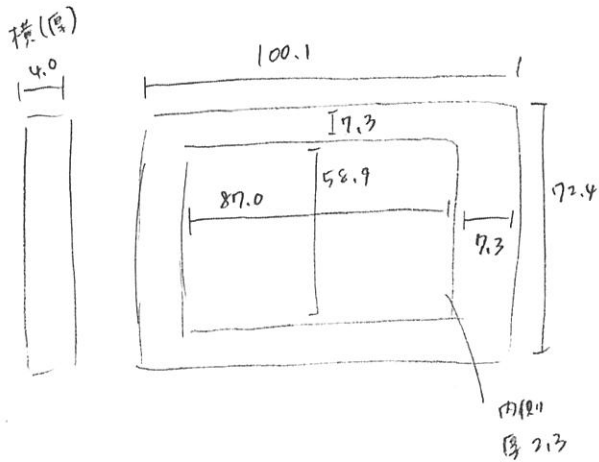


図2：調査の記入例

主に約二四〇〇万画素のデジタル一眼レフカメラを使用した。

本調査で使用している調査は図1のとおり、両研究会のメンバーが考え、作成したものである。内容は、

資料番号・調査者・調査年月日・奉納年月日・寸法を記す欄に加え、特記事項を記入する備考欄を設けた。その左と裏面に、サイズの詳細を書き込むために、イラストも描けるスペースをとった。報告書の目録には、縦・横のサイズのみ記すが、調査には様々な部分の厚みなども計測し書き込んでいる(図2)。

調査を取り終えたものは、梱包が必要なものには施して、もとの場所に戻した。室外での調査・撮影のため、雨や夕暮れは天敵であり、迅速な作業が求められる。これらの一連の作業は、研究会のメンバーのみならず、有志の本学教職員、外部講師の協力により実現することができた。

これまでの調査で最も古い絵馬は、江戸時代後期の文政六年(一八二三)のものである。先述したように中世以降の絵馬の題材は多様である。当然ではあるが、太平山神社に対する信仰を示す絵馬が多数存在するが、その他にも風俗画的なものとして、栃木町の商家を描いたものなどを確認できる。また、近世後期から明治初年の絵馬の中には、俳諧の連や剣術の門人などにより奉納されたものを確認できる。奉納者は太平山



写真1：写真ののり付パネルへの貼り付け

に
お
い
て、一
年
間
の
活
動
成
果
の
展
示
を
行
っ
て
い
る。
近
世
史
研
究
会
は、
別
途
展
示
す
る
活
動

3 平成二九年度斯花祭における展示
 本学の学園祭である斯花祭では、日本史関係のサークルが合同で、本学館の博物館相当施設である参考館

神社周辺の下野国南部や上野国東部を中心に、遠くは江戸・東京の者を確認できる。
 以上のように、調査した絵馬は、太平山神社の信仰圏に加え、かつての栃木町の様子、栃木周辺の在村文化の内容やネットワークを解明するための材料となるのである。



写真2：導入部分の展示風景

があつたため、絵馬の展示は物と伝承の会名義で行った。ただし、調査自体は先述の通り、二つの研究会が合同で行ったものである。

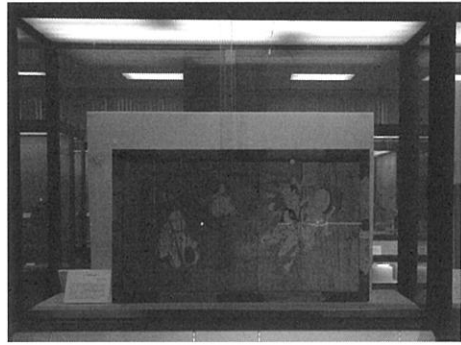


写真3：展示ケースでの展示①

物と伝承の会
が使用できた展
示場所は、二枚
の展示ボードと
二つの展示ケー
スである。

運搬上の問題
などで、今回は
写真をプリント
アウトし、パネ
ルに貼り付けて
展示することと

した。筆者は、見学者に少しでも実物の迫力を感じてもらうために、原寸大の大きさの方が良いと考え、その旨を学生に伝えた。写真は、パソコン上でPhotoshopを用いてトリミングや歪みの補正などを行い、大型プリンターで印刷した。それをのり付パネルに貼り付け（写真1）、展示した。なお、全ての調査済み絵馬を展示することは、スペースなどの問題で不可能なため、展示候補を絞込み、六点を展示した。



写真4：展示ケースでの展示②

展示の順番としては、館内への入口近くにある展示ボードに、コーナーのスタートとして絵馬の概説と調査活動の概要を示し、調査風景などの写真をパネル展示した。つづいてボードに次の二枚の絵馬を貼った（写



写真5：PowerPointを使用しての展示

真2)。

① 祭礼時に屋台の出店などを行う香具師(的屋)が昭和十一年(一九三六)に奉納した絵馬。108.0 cm × 230.0 cm。

② 人形が太平山を遥拝する絵馬。明治二十四年(一八九一)奉納。41.0 cm × 54.0 cm。

展示ケースは両側から見られるため、各二枚を展示した(写真3・4)。

③ 日本神話の天の岩戸を描いた、明治三十三年(一九

〇〇)奉納の絵馬。76.5 cm × 126.0 cm。

④ 太平山神社で盛んであった流鏝馬に関する絵馬。奉納年は不明であるが、奉納者たちは自らの騎射した的を額に貼り付けている。59.6 cm × 177.6 cm。

⑤ 栃木町の薬屋が明治二年(一八六九)に奉納した絵馬。店内が描かれている。98.2 cm × 151.0 cm。

⑥ 商家などが描かれた絵馬。明治二五年(一八九二)に奉納されたもので、魚屋や饅頭屋などが描かれている。116.0 cm × 177.0 cm。

右の他にも、貴重な絵馬が多数あるので、それらについてはPowerPointのスライドショーを作成し、館内でプロジェクターを用いて紹介した(写真5)。

展示準備にあたっては、顧問である筆者の指導のみではなく、本学園参考館副館長中村耕作准教授、同館高垣美菜子学芸員の指導・助言も賜った。お二方にはこの場を借りて、記してお礼申し上げます。

おわりに

平成二九年度斯花祭では、二年間に渡る調査成果の一部を発表することができた。実物大に引き伸ばした写真の画像が荒くなることが心配であったが、来館者の中には「実物かと思った」という感想を述べた方もいたと聞き、当初の目標は達成できたと考えている。

太平山神社には多くの貴重な絵馬が所蔵されており、今後の保存・活用は大きな課題である。しかし、本学の二つの研究会のみでは、この問題を解決することは困難である。調査と成果公開を通じて、地域の人々の理解を得て、ともに考える機会を模索していきたい。最後に、調査のたびに様々な面でご協力いただいている小林一成宮司をはじめ、太平山神社の皆様にお礼申し上げます。

注

- 1 現在の境内の社殿などにも、絵馬を多数確認できる。平成二九年八月の調査では、台風の影響でわか雨の可能性もあったこともあり、社務所軒下の絵馬を調査した。
- 2 栃木県立博物館「栃木県立博物館調査研究報告書 とちぎの絵馬」一九八五年。
- 3 ただし、県博調査で確認されている絵馬の中には、本学による調査で確認できていないものも数点存在する。今後の発見を期待したい。
- 4 「太平山神社」(『角川日本地名大辞典』九栃木県)以下、絵馬に関する概説は、岩井宏實『絵馬』(法政大学出版局、一九七四年)による。
- 5 「在村文化」は杉仁氏の提起した、百姓身分に担われた、民衆文化のことである。詳しくは同『近世の地域と在村文化』(吉川弘文館、二〇〇一年)参照。
- 7 本コーナーでは、同じく平成二九年度栃木県大学・地域連携プロジェクト支援事業に採択されている、考古学研究会・博物館学研究会による「とちぎの古代遺産新発見part.2」の活動も紹介した。